

介護の専門性、そして質

オーストラリアで見た介護施設が改革の契機に

サンビレッジ創立まもない頃に施設長となり、現在は名誉理事長として現場を見守る石原美智子さんに、サンビレッジが長年追求してきた、“介護の専門性”“介護の質”について、これまでを振り返ってお話を伺いました。

石原さんが施設長になった1978（昭和53）年当時、介護は家族が行うものとされ、介護施設に入所する高齢者は、“自宅で介護を受けられない人”でした。施設での介護は、食事・排泄・入浴などのケアが介護士や施設側主体で行われ、高齢者はベッドに寝かしつけられているのが実情だったといえます。

「私がサンビレッジに入ったとき、入所者はベッドに寝かされていて、『とにかく衣食住を与えればいい』という感じで、『施設とはこんなものなのか』と思いました。

あるとき、オーストラリアに研修に行く機会がありましたが、私たちと同じ特養なのに、誰ひとり寝たきりやオムツをしている人はなく、昼間はみんな着替えて起きて過ごしている姿に驚きました。そこは看護師がケアに当たっていて、寝たきりや寝間着では、身体的にも精神的にもよくない、ということを知っていたんです」

介護の専門性というものが、そこにはありました。

「日本とは大きく違うと思いました。こういうプロ意識に根ざ

した介護を日本にも作らなければいけないと、そのとき思ったんです。日本とオーストラリアは何が違うんだろう、とそれからずっと考え続けて……結局は、“尊厳と自立”という点が違うんだな、という考えに行き着きました」

人を人としてどう捉えていくか、という尊厳と、自分の人生は自分で最後まで生きていかななくてはいけない、と考える人々の意識——それがオーストラリアの介護の基本にあると気づいた石原さんは、この“尊厳と自立”を介護の現場で、スタッフといっしょに模索していきます。

介護の専門性とは？ 質の高い介護とは？

「結局、利用者が一番身近にいて、彼らの生活を支えるのはヘルパー。だから、ヘルパーの質をどれだけ高めるか、が大事だと思っています。

私たちはまず、自分たちの職場の中で、絶対にボトムより下がいてはいけない、と肝に銘じています。ここで言うボトムとは、プロとして最低限ここまで満たしたい、というラインです。まず、このボトムラインを満たし、そこから、ひとりでも多くの人材を、“自ら課題を見つけて、生活という視点の中で解決方法を考える力を高めていける人材”へと育てていきたい、と尽力しています。そうすれば、ヘルパー全体のレベルの底上げになり、質の高い介護へとつながっていくからです」

レベルの高い生活支援は、やりがいと楽しさに満ちた仕事、と石原さんは言います。

「介護の仕事の楽しさを知り、誇りを持って働いていけるように、私たちは人を育てていきたい、と思っています」

“生活観察”は簡単なことから始めて 徐々にステップアップ



DVD

シーン 9 >> 00:13:15

シーン 10 >> 00:15:53

人間という多様な生き物の、さらに、生活という人それぞれ異なるものを対象とした介護の仕事。それゆえ、ケアの「生活観察」は奥が深いのです。しかし、身につけていくためには、“奥”ばかりを考えるのではなく、まずは、取っ掛かりである“入口”に入ることが肝心です。

ベテランヘルパー、 小林リーダーの生活観察

入所したての藤本なみえさん。小林リーダーは藤本さんをトイレに誘導しながら、いろいろなポイントを観察します。車いすをこげるか？目はどのくらい見えているか？言葉は理解できているか？……などなど。ケアの基本は利用者のできることを、より多く引き出し、できない部分を支えること。そのため、まず利用者の「できる／できない」を見極めることが第一歩です。

日々、現場で「観察が大事！」と言われ、新人ヘルパーもチャレンジしています。新人の大橋ヘルパーは専門学校でも学んで、“観察”が好き、と言います。そんな大橋ヘルパーでも「その観察が、どうケ

アに結びつくのか」ということは、とまどいがありました。さらに、観察が苦手な人の声を聞くと、「“お世話”はできて観察って……何を見るの？」

日常生活の中で、さりげなく観察し、ケアに結びつけていく先輩の姿を見ているだけではピンときません。

まずは簡単な“生活観察”から 始めてみよう

施設開設当初の嵐が少し落ち着いた頃、「基本アセスメントシート」があまり活用されていない、という声が上がりました。これに書かれている内容は、利用者の生活支援に不可欠な身体動作や認知レベル、また、食事、排泄、入浴、更衣など基本的なチェックポイン

現場の気づき



桑原 陽施設長

「基本アセスメントシート」はケアにおける「基本の“き”」。当然、最初から現場にありましたが、ベテランは経験値でケアができてしまうので、ついつい、基本アセスメントシートなどの記録を置き取りにできてしまっていたようです。それに気がついて私はびっくり！



岩田三紀ヘルパー（ヘルパー・10年目）

立ち上げ当初は、忙しさのあまり、書類の整理もままならない状態でした。そして、気がつくと大切な書類が埋没していたんです。

トです。“観察”が苦手な人でも、「このポイントに注意すればいい」と具体的にわかれば、観察しやすくなります。そして、簡単な観察を繰り返すうちに、“観察”と“ケア”の結びつきが見えてきます。小林リーダーいわく、「小さなことでも自分の“観察”がケアに結びついているとわかれば、うれしいもの。すると、“観察”が楽しくなるんです」

奥の深い“生活観察”ですが、ヘルパーの力量はさまざま。レベルに合わせて、最初は簡単なことから始めることも、ひとつの手です。

ベテランヘルパーであっても 基本をおろそかにしてはいけない

ベテランヘルパーでも、観察が偏ることはあります。特に繁忙期にそれは起こりがち。基本アセスメントシートは、ケアを考える基本となるため、こ

のシートを定期的に見直し、情報を更新し、皆が確実に把握し、共有することが必要です。

基本アセスメントシート

事前訪問のときなど、利用者の入所前に、利用者の身体や生活情報を記入するシート。そして入所後、利用者の施設での生活の様子を観察して、情報を更新していきます。事前の情報では立ち上がれない、となっていた方が、施設で試してみたら、事前情報と異なり、立ち上がるのができた、なんてことも。そのため、観察は“自身の目”で確かめることが大切なのです。